

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 11日現在

機関番号：12611

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820027

研究課題名（和文）

ロックとライプニッツ自我論における意識から逃れ去るもの

研究課題名（英文） Elements that Escape the Consciousness in the Theories of “I” in Locke and Leibniz

研究代表者

中野 裕考 (NAKANO HIROTAKE)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・助教

研究者番号：40587474

研究成果の概要（和文）：

ロック『人間知性論』で展開されている知識論ならびに意識論においても、ライプニッツ『形而上学序説』『人間知性新論』『モノドロジー』等にみられる形而上学、意識論においても、「私」という自己意識は、意識を超えたものとの関係においてのみ可能であり、最終的には無限な知性としての神との関係でのみ可能であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

In Locke's theory of knowledge and consciousness presented in the Essay concerning the Human Understanding, as well as in Leibniz' metaphysics and theory of consciousness elaborated in the Discourse of Metaphysics, New Essays concerning the Human Understanding, Monadology etc., it revealed that the self-consciousness of the I or the Ego is possible only in relation with something beyond of the consciousness itself and, in ultimate instance, with God as the infinite intelligence.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,050,000	315,000	1,365,000
2011年度	890,000	267,000	1,157,000
総計	1,940,000	582,000	2,522,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：研究活動スタート支援

キーワード：ライプニッツ、ロック、意識、自己、動物、人間、理性、知覚

1. 研究開始当初の背景

「自己意識の反省モデル」としてデューター・ヘンリッヒに名指しされたデカルト、ロック、ライプニッツ、ルソー、カントの自我論は、実は反省モデルとはいえないのではないか、という疑問が本研究の出発点である。反省に基づいて自己意識の成り立ちを跡づける自我論の難点をフィヒテと初期ロマン派が乗り越える、という図式に対しては、カントに関してはすでに盛んに反論が提出されている。本研究の最終目標は、カントについてもそうだがそれ以外の上記の哲学者の

自我論も、反省モデルを免れた仕方でも組み立てられていることを示すことである。今回はロックとライプニッツを取り上げ、彼らの自我論に関して次のような論点を提示し、解答に向けた展望を示したい。それぞれの体系における「反省」と自己意識はどのような関係に置かれているか。反省によっては捉えられないにもかかわらず依然として自己として言及されうる側面をロックもライプニッツも見て取っているのだが、それはいかなる資格で「自己」とみなされるのか。この、いわば反省を逃れ去る自己は明示的な自己意識

の成り立ちにとってどのような役割を果たすのか。最後に、自分自身を全体として知ることができないという人間の知性の有限性が人間の時間的な在り方を不可避的で本質的なものとしているようなのだが、この時間性が反省されざる自己をいかにして生起せしめるものなのか。こうした諸点の考察を通じて一種の有限性の自我論を素描し、ヘンリッヒの単純化された図式に異を唱える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、経験論と合理論の代表的な哲学者であるロックとライプニッツの自我論において「意識されないもの」あるいは「意識から逃れていくもの」の位置を明らかにすることである。近年、英米圏の「心の哲学」、ドイツの「主観性の哲学」の文脈のなかで、自己意識における明示的な対象の不在について盛んに論じられている。ただ現状では、一方の英米圏の議論においては過去の哲学者が顧みられることは多くなく、またあったとしてもテキストに内在的な評価がなされることは少ない。また他方のD・ヘンリッヒやM・フランクを中心としたドイツの研究ではフィヒテ以前の哲学者に対する評価が低くなってしまっているのが現状である。この文脈のなかで本研究は、ロックとライプニッツにおいて、意識されないにもかかわらず自己として認められるものの意義を問うという、従来とはやや異なるアプローチの仕方を試みてみたい。すなわち意識された限りでの自己・自我・「私」に注目するのではなく、ロックにおける「魂」やライプニッツにおける「微小表象」、意識されないにもかかわらず「自己」に帰せられることの根拠を問うのである。その際、両哲学者の、固有であると同時に多くの場面で対照的である内的論理を、一方的に優劣をつけたり後続の哲学者の視点から評価したりせずに、内在的に解明することを旨としたい。

3. 研究の方法

哲学史研究の方法論としては、研究対象が属する時代の歴史的状況を重視したり、当時の他の哲学者との関係から研究対象を理解したりするものもあるが、本研究がとるのはあくまでも研究対象とするテキストそのものに立脚し、そのテキストを研究者自身の観点から徹底的に分析するという方法である。テキスト外的な歴史的状況を無視することはもちろんできないが、それによってテキストそのものの理解が理由もなくせばめられることがあってはならない。また他の哲学者との位置関係という問題も哲学史の重要な

課題ではあるが、それを知るためにもやはりテキストそのものの理解が出発点になるはずである。テキストの理解を得ることを目指す際に、テキストの意味が客観的に定まっているという立場も、本研究はとらない。つまりテキストを読解する現代の私たちの理解の仕方を離れたところに自存するような、客観的な歴史的事実として、テキストの意味を想定し、それを追求するという研究姿勢をとるものではない。それは、そのような客観的な歴史的事実といえども、やはり最終的にはその都度その都度のテキストの読解という現在の実践に基づいているものだからである。

そこで本研究は、ロックとライプニッツによって書かれた主要テキストを研究の対象とし、現代の私たちの視点からそれを分析するという方法論を採用した。ただしロックの『人間知性論』とライプニッツのテキストとは性格が異なるため、その性格の相違を反映してテキストの扱いについて若干の区別を設けることは必要であった。

ロックの『人間知性論』は、1690年の初版と1694年の第二版の間のずれも重要ではあるが、ともあれ哲学者本人によって刊行された、一つの完結した作品である。本研究が関心を向けたテーマは、ほぼこの著作において論じられていると見てよい。従ってこの書物を、多くのテーマに関して首尾一貫した言明を行うものと理解することが可能である。そのため本研究は、ロックに関してはこの書物に集中し、とりわけ第一巻、第二巻、第四巻の記述から、意識、自己意識、人格、そして神といった問題についてのロックの思想を辿るという作業を行った。

他方、ライプニッツの場合は事情が少々複雑であった。ロックの『人間知性論』に対抗して書かれた『人間知性新論』は、哲学者の生前に刊行されることがなかったとはいえ一応完結した著作とみなすことができる。ただそれだけでは、本研究の関心テーマについてのライプニッツの考えを明らかにすることはできない。それ以外にも『形而上学序説』、『モノドロジー』、『理性に基づく自然と恩寵の原理』、『弁神論』といった関係する著作も、生前に出版されたか否かは別として一応完結したものとみなすことができる。けれどもこれらの諸テキストは相互に執筆年代が隔たっているだけでなく、ほとんど常に特定の読み手を想定して読み手に合わせて用語や議論のスタイルを変えるというライプニッツ特有の叙述形式を考慮に入れなければならなかった。それはすなわち、ロックの場合のように、同一平面上に属する一つの書物として、諸テキストを扱うことが難しいということである。そのため、ライプニッツに関しては、「意識」「反省」「統覚」等々の、本研

究にとっては極めて重要なキーワードの意味の揺らぎが大きいという困難があった。個々の用語の意味を確定すべく、多くのテキストにおけるその語の用法を洗い出すという作業についての先行研究があるという事情もあったが、そもそもそれによって本研究の目指すことが実現できるとは思えなかった。「反省」という語にしても、異なるテキストにおいて一貫した意味をもっていると主張する論者もいるけれども、本研究の視点からするとその立場に追随することはできず、むしろ個々の文脈において異なる意味をもたされていると考えた方が、ライプニッツの思想の深みをよりよく捉えられるように思われた。このような次第で本研究は、個々の用語の用法を確定することを目指すという、いわば哲学史研究のオーソドックスな方法を放棄した。その代わりに、多くのテキストを分析して、その都度異なる用語、異なる論述スタイル、議論構成をとりながらもその底流として一貫したライプニッツの自我論があるのではないかという仮定のもとに、ライプニッツの多様なテキストを分析していくという方法をとった。上にあげたような、一応完結した著作とみなせるようなテキストばかりでなく、さまざまな相手との間に交わされた書簡、あるいはライプニッツが本人のために書きためておいたデカルトやペールに関する研究ノート、また作品のための未完の準備草稿といったものも含めて、「私」という一人称の意識がいかんにして可能かという問題を、意識を超えたもの、意識を逃れ去るものとの関係で問いただしながら分析するという方法である。

4. 研究成果

ロックに関してもライプニッツに関しても、「私」という自己意識は、意識することのできない内容との関係でのみ可能であるような仕方では捉えられている。そして意識できない内容は、最終的には全知の神によってのみ把握されるようなものである。その点で、ロックとライプニッツはともに、人間の知性の有限性が自己意識の必須の条件であると考えていたことになる。

ロック：ロックの意識論を知るための主要テキストは『人間知性論』第一巻の生得説批判、第二巻第一章の観念説、第二巻第二十七章の人格論、さらに第四巻第九～十章の自己と神の存在についての議論である。その重要ポイントは以下のようにまとめられる：

- ・感覚、内省、思考、意志といった心のあらゆる働きは常に意識されている。
- ・心の働きに伴うこの意識は内省とは異なり、自己自身を対象化することのない直接的な自己関係である。

- ・人格とは内省によってではなく意識によって定められ、「私」意識と一致する。
- ・人格は実体としての魂とは異なる。
- ・意識されないような微小な知覚をロックは認めているが、それは意識と一致する人格に属するということはできない。
- ・意識を逃れる微小な知覚は、実体としての魂に属するといわざるをえない。
- ・人格概念には法廷用語としての側面もあり、従って人格概念は一人称の視点だけで汲みつくすことができない。
- ・法廷用語としての側面を最終的に下支えるのは、最終的には「最後の審判」における神の判定への訴えである。
- ・他方、自己の存在の意識は永遠なる存在すなわち神の存在の証明としても機能している。
- ・永遠なる存在にとっては、過去・現在・未来の区別や空間的な遠近の区別が意味をもたない。
- ・人格における自己意識からは逃れ去るような感覚や知覚は、「私」のうちにあるということではできないが、端的な無だということもできない。
- ・従って人格ないし自己意識は、意識を超えたものとの関係に位置づけられており、それは神の知性によってのみ把握されている。
- ・意識の限界は有限な知性の必然的・本質的な特徴だから、有限な知性の「私」とは神の無限な知性によって可能になっていることになる。

ライプニッツ：ライプニッツ意識論の主要テキストは、『形而上学序説』、アルノーとの往復書簡、『人間知性新論』、『モノドロジー』、『理性に基づく自然と恩寵の原理』、『弁神論』、またいくつかの書簡である。その重要ポイントは以下のようにまとめられる：

- ・意識できない微小な表象は、ライプニッツ認識論で全面的に肯定されている。
- ・認識論だけでなく形而上学においても、あらゆるモナドは微小表象をもつとされる。
- ・動物の魂に対応するモナドは微小表象だけでなく焦点化された表象をもつ。
- ・人間の魂に対応するモナドは理性と「私」という意識をもつ。
- ・従って人間の自己意識は、意識できない微小表象との関係でのみ可能となっている。
- ・自己意識においてモナドは自らの制限と神を知る。
- ・制限とは、被造物が受動性、物質性を持ち、そのために宇宙全体を判明に知覚することができないという点に存する。
- ・被造物の意識の受動性、物質性、非判明性は、被造物が作られた存在であって自己自身を作る存在ではないことに基づいている。
- ・神はいかなる受動性、物質性、非判明性

ももたない、純粹作用、非物質的で完全な知性である。

・神にとっては過去・現在・未来といった時間的区別も空間的遠近も意味をもたない。

・従ってモナドがもつ「私」という意識が自らの制限および神の知と相関しているとすれば、それは、自己意識が宇宙全体を直接的に完全に認識する無限の知性の相関者として可能になっていることを示している。

・自己意識とは、自己を対象として捉えることによって可能になるのではなく、自分が宇宙全体を認識できていないことに気づくことによって与えられるものだということになる。

・宇宙全体を認識できないということの根拠は、究極的には自己自身を対象として認識することができないという事実にある。自己自身を対象として認識できるということは、認識の主体と客体との差異が消失し、知性と宇宙が一致し、従って宇宙全体が直接的に認識される、ということと同義だからである。

・被造物が宇宙全体を認識できず、自己自身を認識できないのは、被造物に含まれる受動性、物質性、表象の非判明性といった不完全性のためである。

・理性をもった被造物に自己意識があるのは、この被造物が自らの不完全性そのものを認識するということを意味している。

・自己意識とは、自らの不完全性の意識である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

①中野裕考「ロックとライプニッツの有限な自我」、哲学・倫理学セミナー、2010年11月27日(文京区民センター)

②中野裕考「ライプニッツの有限性の自我論」、哲学・倫理学セミナー、2011年10月29日(文京区民センター)

③中野裕考「ライプニッツの有限な自我」、日本ライプニッツ協会、2011年11月13日(神戸大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中野 裕考 (NAKANO HIROTAKA)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・助教

研究者番号：40587474

(2) 研究分担者
無し

(3) 連携研究者
無し